

英国
便り

「イラク参戦」から 「ロンドン爆弾テロ」まで

山上 真 Shin Yamakami

文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。



ケンブリッジの初夏の公園



イラク参戦に反対するデモ行進。ピカデリーサーカス付近で

英
国
便
り

「イラク参戦」から
「ロンドン爆弾テロ」まで
山上 真 Shin Yamakami



文芸社

目次

- (一) 英国・イラク戦争前後 7
- (二) イラク戦争後の英国 29
——ブレア政権は何処へ？
- (三) 今年もまた「赤いポピー」の季節 39
——終章なき戦争の歴史
- (四) イラク戦争から一年 52
——スペインからの「嵐」に身構える英国政権
- (五) 全てが総選挙に収束する英国政局 60
——高まる一方の「ブレア氏辞任」への圧力

(六) 「監視国家」への歩みを速める英国 70

——「イラク侵略」の行き着く先か？

(七) マス・メディアと「英国ナショナリズム」 79

(八) 二〇〇五年「英国総選挙」前後 88

——「イラク戦争」の影の下に

〔三・一九国際行動「ロンドン反戦集会」とデモ〕 88

〔イラク情勢と英国内の動き・選挙戦前〕 91

〔英国総選挙戦始まる〕 97

〔総選挙後〕 100

〔「イラク参戦」とブレア政権〕 101

〔労働党政権の現状〕 103

〔英国の抱える諸問題〕 108

(一) 保健・医療 108

(二) 福祉事情 110

(三)	教育	111
(四)	環境	113
(五)	経済	115
(六)	IDカード計画	119
(七)	反テロ法	123
(八)	犯罪	125
(九)	その他の社会問題	125
	〔各党選挙運動〕	126
	労働党「後退でなく前進を！」	126
	保守党「移民・難民管理の厳格化を！」	139
	自由民主党「真の政権交替党」	143
	緑の党、リスベクトなど他の党派	149
	〔選挙戦と英国社会の全般的動き〕	153
	〔選挙風景〕	165
	〔総選挙直前までの情勢〕	168

〔投票終了・開票開始後の動き〕 169

〔総選挙結果〕 176

〔選挙後の動き〕 177

〔総選挙・総括と英国政治の今後〕 184

(九) 「G8」、「オリンピック」、「そして「爆弾テロ」 196

あとがき 207

(一) 英国・イラク戦争前後

二〇〇三年四月初旬に訪れた英国は、なだらかに続く丘陵地に黄金色の菜の花が一面に咲き、周りの淡い緑と見事な対照をなして、確かに美しいものでした。加えて、街角の所々に、八重桜が日本で見るとよりも色鮮やかに咲いているのです。

私事で恐縮ですが、五年ほど前に縁あって、ロンドン南西部にある学校で日本語を教えることになり、二年間の滞在の後、年に幾度か、こちらを訪れているのです。現在は、ロンドン北



英国中部地方の菜の花畑



2年間日本語を教えたイートン校本部の中庭

東に位置する田園地帯に囲まれた小さな町に
仮住まいをしているところです。

さて、私の心の中で、消えようもないわだ
かまりは、この地の自然の美しさとは裏腹に
見える、この国の性格は一体どんなものか、
ということでした。街角の様子から見ると、戦
争を好む、或いは戦争を受容するような雰
気は、全くと言ってよいほど見当たりませ
ん。しかし、政治段階になると、不思議な
ほど戦争行為というものへの抵抗感が見
られないのは、ここ数十年の間のフォー
ークランド戦争、ユーゴスラビア戦争、
アフガニスタン戦争、そして、今回の
イラク戦争への英国の主體的参加の仕
方を見れば、容易に分かることです。

この間、政権は保守党から労働党に替わっ

たのですが、事戦争ことに関する限り、その政策はほとんど変化が見られません。それどころか、アルゼンチン沖の小島をめぐる紛争を戦争へと発展させた、「鉄の女」の異名いみょうを持つマーガレット・サッチャー女史とトニー・ブレア氏との間には、驚くほどの相似性があることは、多くの識者が指摘しているところです。「ニュー・レイバー」を率いるブレア氏は、新たに鉄道、郵便を民営化し、さらに、これまでは誰もが無料で治療を受けられたNHSと呼ばれる医療制度を、ファウンデーション・ホスピタル（基金病院）という形の民営化路線に切り替えようとしておりますが、労働党内外の強い反対論を物ともせず、このような政策を押し進める際の強引さが、実にサッチャー女史のやり方と似ているのです。最近では、「労働党のサッチャー」という言葉もよく使われています。

今度のイラク戦争においても、戦争前の英国の世論は、ブッシュ・ブレアの武力行使に対して、圧倒的に反対でした。

英国の精神的世界に依然として大きな影響力を持つカンタベリー大司教ウィリアムズ師は二〇〇三年の年頭に特別声明を出し、「罪のない人々に苦しみを課するいかなる戦争にも断固反対する」と述べました。二〇〇二年九月頃からは、イギリス全土で波状的な反戦デモが続いており、二〇〇三年一月段階での賛成論は二十％程度にすぎませんでした。

テレビの討論会は、戦争参加に向かって説き伏せようと躍起になるブレア氏が、多くの参加者の烈しい論駁ろんぱくに遭って、たじたじとなっている様子を映し出していました。或る中年の女性が、「すでに英米の制裁で苦しめられているイラクの人々が、新たな戦争で、どれだけひどい目に遭うのか、あなたは分からないのですか。たとえサダム・フセインが悪くても、戦争を正当化できませんよ」と必死な様子でブレア氏に詰め寄っていたのが印象的です。イギリスの人々が心配しているのは、すでに第一次湾岸戦争、ユーゴスラビア戦争で見たような烈しい空爆さくばくに曝さらされるであろうイラクの民衆の前途であり、確かにフセイン政権の非道ぶりを理解することはできても、民衆の側に罪を負わせるべきではないとしているのです。

労働党政権内部でも、イラクへの武力行使をめぐっては、大きな亀裂を生じておりました。前外相ロビン・クックを含む、閣外相と呼ばれる四人の政府高官が武力行使の方針に抗議して辞任し、下院議会での戦争容認決議案は、保守党の賛成によって通過はしたものの、百三十名を超える政府与党議員の造反を引き起こしたのです。

英国の有力紙ガーディアンは、二〇〇三年一月九日、「反戦運動手が武器の輸送を拒否」と報じました。ペルシヤ湾岸地域に派遣される英国軍のために、グラスゴーからスコット

ランド西岸のグレン・ダグラス海軍基地まで武器・弾薬を輸送することを、二人の列車運転手が拒否した、というのです。労働組合幹部も、戦争に対するこの二人の「良心的異議申し立て」に同調し、結局、道路輸送に切り替えられたそうです。同紙によると、過去に、ボルシェヴィキ革命に対する反革命軍援助の動きがあった時と、チリのアジェンデ政権転覆時に、こうした例があっただけということです。

一月下旬からのロンドンでの反戦デモには、高校生など若者の参加が目立ちましたが、ロンドン北東エセックスの或る高校では、一女生徒が、イラク戦争反対のデモ参加を級友や先生に呼びかけ、その行動の過程で、その学校の制服着用を拒否したり、先生を「ファシスト」呼ばわりしたりしたことで、三十日間の停学処分を受ける、といった出来事がありました。三月二十日に校外で行われた反戦デモには、五百人ほどの生徒のほか、父母や教師も何人か参加したそうですが、その処分については、人権擁護団体「リバティ」が不当と判断し、高等裁判所に緊急提訴しました。GCSEという大事な全国一斉試験を前にして、この生徒の一日も早い復学を求めたわけですが、裁判所は、その生徒の行動に「馬鹿げた」面があったことは認めた上で、今後は学校の規範を守るように条件を付けて、学校当局に、その生徒の復学を命じました。



イラク参戦に反対するデモ行進。ピカデリーサーカス付近で

二月十五日の、インターネットやビラ、新聞などによって呼びかけられた反戦デモに、ロンドンだけで百万を優に超え、一説には二百万と言われる市民が参加したことは、史上最大のデモと言われたものです。家族ぐるみの参加も目立ち、市の中心ピカデリー・サーカス周辺の道路は人、人、人で埋め尽くされました。ロンドン市長ケン・リヴィングストンも、根っからの反戦議員であるジョージ・ギャロウエイら幾人かの労働党議員と並んで、ハイドパークでの大集会の演壇に立ちました。この時の戦争反対の声の盛り上がりから見ると、ブレア首相がブッシュの戦争に参加することは、到底不可能に思われたのです。しかし、三月十九日、やはり、戦争は引き起こさ

れました。

ブレア氏の戦争参加への理由は、「イラクは、間違いなく、大量破壊兵器を持っており、数十万、数百万の人々を殺戮する恐れがある」という、いかにも尤もらしく、しかも雲を掴むようなものでした。ブリックス氏の率いる国連査察団が数カ月かけても発見できず、旧査察団の信頼筋は、「実質的な大量破壊兵器は、イラクにはもはや存在しない」と言明しているにも拘わらず、どんな根拠をもって、戦争という大量破壊行為を開始できたのでしょうか。ブレア氏には、後にインディペンデント紙などが指摘するように、「米国情報筋のイラク大量破壊兵器所有説が虚偽だとしても、憎むべきサダムを倒すことができれば、後はどんな言い訳でも取り繕える」という読みがあつたのかもしれない。

英国はその総兵力の約四分の一をイラク南部に投入して、イラク第二の都市バスラの制圧を目指しました。当初の目論見では、英国軍は「解放軍」として、シーア派の多い地域の住民から温かく迎えられるはずでしたが、そうでなかったことは、日を追うごとに明らかになっていきます。イラク民兵、正規軍の抵抗は執拗に続き、二週間かけてようやく中心部を制圧した後、今度は、水や食料を求めるイラク民衆の反英米デモに直面しています。

バグダッドが予想された激しい抵抗もなく、早期に陥落したことは、一つには、米軍に

よる初期の猛爆がイラク軍の戦闘意欲を徐々に殺^そいでいったこと、もう一つには、サダムへの忠誠心が民衆のある部分に限定されていたことに因るものと思われませんが、ともかく、バグダッドでの市街戦で大量の血が流されることが避けられたのは、不幸中の幸いと言わなければならぬでしょう。

しかしながら、この戦争で、イラク側に一体どれくらい的人的被害が出たのでしょうか。米軍参謀部の公式発表によると、相変わらずの誤爆被害者を含む民間人の被害数は千人以上、戦闘員の犠牲者数は二千〜三千人ですが、実際の数字はこれらを遥かに超えるものと思われず。

米英軍の死亡者は百十七名、そのうち、英兵は、米軍のパトリオット・ミサイルで撃ち落とされたヘリコプターの乗員七名を含む三十二人です。これらの数字が物語るのは、最新兵器の破壊力によって、いかに味方の被害を少なく、効率的に相手を打倒するという目的を達成できるか、ということであり、だからこそ、アメリカやイギリスが比較的安易に戦争という手段に踏み切れることになるのでしょう。

「衝撃と畏怖^{いふ}」と米国防長官ラムズフェルトが自ら名付けた史上空前とされる空爆によって、どれだけの建造物が破壊されたことかは、想像するまでもないでしょう。考古学者が

指摘するように、この中に、メソポタミア文明を代表するような歴史的遺構も含まれてはるはずだ。

バグダッドのサダム政権が消滅すると同時に、略奪が始まりました。その対象は博物館も例外では有り得ませんでした。むしろ、希少な宝物を収蔵している博物館こそ、略奪者たちの一番のターゲットになるといえることが、誰でも分かることなのです。ところが、占領軍は何の対応もしませんでした。米国の武力行使の目的の一つは、世界で二番目の埋蔵量を誇るイラクの石油を確保することだとされていますが、案の定、米国軍が最初に守備隊を張り付けたのは、石油省の建物だけで、他は皆、略奪させるままにしておいたのです。

事態を知ったユネスコや、バグダッド博物館の関係者が、現地の米軍当局者に直ちに守備するよう要請したにも拘わらず、三日間は放置されたままで、ようやく兵が配置されても、略奪を止めようとしなかったというのですから、驚き呆れます。ガーディアン紙によれば、この間に、この博物館収蔵の五千年に及ぶ古代美術品、約十七万点のうち、「ワルカの花瓶」(BC3100)、「ヒムルドの獅子」(BC850)などの極めて貴重とされる四千点を含む展示品のほとんど全てが、持ち去られたということです。

博物館の被害状況を最初に報じたのは、テレビ局フランス2でしたが、長い間、研究に

携ってきたフランスの女性考古学者が、陳列物を見るも無惨に壊されていたり、持ち去られたりしている館内の様子を見て、悲鳴を上げていた映像が印象的です。

この事件は、今度の戦争を引き起こした者たちの正体を暴露して余りあるものとも思われます。悪者退治という口実を設けて、石油という宝を手に入れようと目論む一方、世界文明の揺籃地ようらんちの一つであるメソポタミアの生んだ文化財の価値には全く無知な乱暴者の本質を、自ら暴露したのです。人類の精神的遺産を大切にしない者たちが、「解放者」などと自任することは、喜劇というよりも、悲劇でしかありません。

現在、大英博物館など、欧米の関係機関が調査に乗り出し、紛失美術品の回収方法を具体化しつつありますが、すでにイラク国外の密売ルートに流されている事実も明らかにされており、原状回復は不可能に近いでしょう。

開戦から一週間ほど経った頃に行われた、この戦争の賛否を問う世論調査では、開戦前と形勢が逆転しました。開戦前、ブレア首相の戦争遂行姿勢は、五十八対四十二という割合で不支持のほうが多かったのです。しかし、開戦から一週間後には、四十三対五十七と、逆転しました。どうしてこのような変化が起きたのでしょうか。このような例は、過去の

戦争の際にもよく見られたことですが、訝いぶかしく思ったのは、私だけではないでしょう。

戦況が進むにつれて、当然のことながら、交戦中に死亡したり行方不明になる、或いは車両が転覆して死んだり重傷を負う、或いはまた味方の砲撃を受けて死傷者を出す、といった形での報道が、連日、英国の各家庭のテレビ、ラジオなどを通して飛び込んで来ますが、その生々しい映像を目にして、直接的なインパクトを避けて通ることは、甚だ難しいことでしょう。特に、同じ町で知っていた青年が当事者だったり、そうでなくても、かなり自分と近い者が、戦場で苦しみながら戦っていたりするという事実そのものが、平安な生活の中にいる者を圧倒するに違いありません。

テレビでは、大体において、全国ニュースに続く地方ニュースで、「バスラで戦闘中に死亡した誰々が今日の午後、母国の地に帰還しました。明後日、町の教会で葬儀が執り行われます」といった形で報道されます。葬儀の日には、同じ部隊にいた上官の、「英雄的な」死を悼む声、友人の思い出話、数十人もの同僚兵士たちによる威儀を正した葬列、そして、教会での厳かな儀式、これら全てが映し出されて、いきおい、多くの人々に深い感情を植えつけることになります。報道の最後には、必ずと言ってよいほど、「彼は祖国のために亡くなったのです」という言葉が、レポーターによって添えられるのです。

このような雰囲気の中で、「彼は意味のない戦争で大死にしまった」と言うことが、かなり勇気の要ることなのは、太平洋戦争中に、以前は戦争に批判的だった日本の文化人の多くが、結局のところ、大政翼賛会に入るなどして、戦争を肯定する方向に靡なみいていったことを見ても、理解できます。

他方では、マス・メディアの戦争報道の仕方、その方向に拍車をかけました。英米軍部隊への従軍を認められたことで、部分的な戦闘場面は詳細に報道できても、軍当局の公式発表を無批判に流すような傾向が強かったように思われるのです。そのために、私は、中東カタールの衛星テレビ局アルジャジーラのほうが、欧米の報道機関よりも、信頼できる印象を抱いたくらいです。

それに加えて、例えば大衆紙サンは、第一面にでかかど「トレイター」のタイトルを躍らせ、英議会内外で果敢な反戦演説をぶつ労働党左派のギャロウェイ議員を、裏切り者と攻撃しています。サダム・フセインと握手している写真を添える念の入りようです。サダムと握手した人は、日本の政治家も含む大勢の人々がいるでしょうが、既に報道されているように、他ならぬラムズフェルト米国防長官も、そのうちの一人なのです。

いずれにせよ、こうして、次第に「反戦」は言いにくくなり、多数が戦争に賛成である、

という世論が、この英国でも形成されたのです。そして、予想より早くバグダッドが陥落したことをもって、ブレア氏の「成功」というイメージが、一方的にマス・メディアによって唱えられ始めたのです。けれども、その「成功」説は、間もなく行われた地方選挙によって、真偽のほどが試されることになりました。

米英軍「勝利」後のイラクの様子は、その言葉に相応しくないことが、ますますはつきりしてきています。既に述べたバスの混乱、バグダッドのシーア派の「イスラム国家樹立」を求める反米デモ。さらには、バグダッド郊外ファルージャという町で、学校を兵舎にした米軍に対する抗議デモが銃撃を受けて、イラク人十五人が死亡、四十人余りが負傷する、という事件が起きています。この他、イラク全土において、ほとんど毎日と言っていいくらい、米英兵、イラク人双方の死亡、負傷が伝えられています。

ブッシュ政権が一番のターゲットとした、肝心のサダム・フセインは、行方不明のままです。オサマ・ビン・ラディンと言い、サダムと言い、米英がテロリズムの首謀者と定めて、駆逐するために二つの戦争まで引き起こした揚句、いまだに捕捉できないのです。イラク戦争遂行の大義名分だった「大量破壊兵器」も、いまだ見つかっていません。一体、

何のための戦争だったのか、世界中の多くの人々が疑問を抱くのは、当然です。

四月下旬に、ブレア首相は、ロシアのプーチン大統領と会談しましたが、そこで、彼は、サダム政権時には医薬品の禁輸など、厳しい経済制裁を課してイラク国民に苦痛を与えたことの裏を返すように、今度は、米英軍主導下の暫定政権への「制裁」解除など、戦後復興への協力を求めたのですが、このような、国連安保理無視の横暴な態度は、冷たくあしらわれました。プーチン氏は、大量破壊兵器の有無などを問い、この際、「あなたの言うことは、信じない」という嘗てない厳しい言葉を使ったとされ、ブレア氏は惨めな立場に置かれたと、英タブロイド紙は伝えています。これと前後して、シラク・シュレーダー会談が行われ、米国との距離を置いた欧州主導の安保構想を話し合っていました。この会談に、ブレア氏が呼ばれなかったことは、イラク戦争をめぐる対立した独・仏と英国が、依然として亀裂を深めたままの状態にあることを示しています。

米国内では、戦争前から、国連安全保障理事会でイラク戦争反対の説得力ある熱弁を振るうドビルパン仏外相への反感と共感が同居する一方、米議会の議員の中に、「フレンチ・フライ」を「フリーダム・フライ」に言い換えたり、一部の町では、フランス・ワインの

瓶を叩き割ったりする、度を越した反仏の動きが出てきました。英国内でも夕刊紙などが、シラク大統領の顔を醜悪に見せるカバーを付けて、反仏を煽ろうとすることはありませんが、例外的な動きでした。私が、幾つかの都市や町を見た限りでは、反戦のビラが見られることはあっても、反仏や、戦争美化のものは、ほとんど見当たりませんでした。「ほとんど」としたのは、実は、私の住む町のある家で、窓の所に、若い兵士の顔写真を大きく載せて、「我が息子たちを支えよう」と大見出しで呼びかけているタブロイド紙サンを飾っていたことが、一件あったからです。

米英軍に対する湾岸諸国の態度は、前回の湾岸戦争の時と較べて、冷淡どころか、極めて批判的なのが特徴です。バグダッド陥落の頃に開かれた湾岸諸国外相会議では、米英軍の可及的速やかな撤退を求めることで一致しました。つい最近では、一九九一年から続いていた、サウジアラビアでの米空軍の駐留が、近く終了するという両国共同声明が発表されました。これは、明らかに、アラビア半島に於けるアメリカの主導権維持を図ろうとする米国の本意とは異なるものであり、サウジ側の、イラクへの米軍侵攻に対する激しい反発があるものとされています。こうした国家規模の反米英的態度に加えて、一層重大なのは、アラブ世界一円に広がった反米英感情です。バグダッド陥落に至るまでの、圧倒的な

軍事力の差を見せつけられた人々は、欧米のマス・メディアのインタビュアーに対して、絶望感を滲ませ、無言で抗議している様子でしたが、その、怨念とも受け取れる感情は、近い将来、さらに激しい形を取って爆発するかもしれないのです。エジプトのムバラク大統領が、「今度の戦争は新たな三百人のオサマ・ビン・ラディンを生む結果しかもたらさない」と語った所以です。

四月二十二日付の英保守系紙デイリー・テレグラフは、多くの英国民にとって衝撃的なニュースを第一面に掲載しました。前述の反戦議員ジョージ・ギャロウェイ氏が、事もあろうに、サダム・フセインその人から、多額の賄賂を過去数年に涉って受領していた、という内容の記事を、イラク外務省の秘密文書と共に掲載したのです。決め手とされる文書は、米軍の爆撃で、ほぼ灰燼かいじんに帰した外務省内部の一郭で、テレグラフの一記者が、英国関係の文書類を全く偶然に見つけ、それを持ち帰って、イラク人翻訳者の手を借りて中身を調べたところ突き当たった、というわけです。

ギャロウェイ議員は、休暇先のポルトガルの町で、インタビュアーに対して、「反戦活動を止めさせるための捏造ねつぞうだ」として、その記事内容を全面的に否定し、直ちに裁判に訴え

ることを明言しました。

この事件についての見方は、ジャーナリズムの世界では割れていますが、中立的な立場のインディペンデント紙は、他の特派員たちが、水や食料を求めるデモが続く混沌状況と、官庁や博物館などの窃盜被害を取材するのに苦しんでいる中、この記者が、どういう偶然性をもって、その「極秘文書」にありつけたのか、その文書を黙って持ち帰った行為そのものがlooting（窃盜）ではないのかとして、事件発端の不自然さを指摘する一方、ギャロウェイ氏個人の、過去における金銭に絡む事件、派手な生活振りを取り上げて、この問題の予断を許さない結末を示唆しています。なお、ブレア氏の意向を代弁する労働党関係者は、この初期の段階で既に、ギャロウェイ議員に対する、党からの追放処分を匂わせていました。つい先日、同議員がブレア、ブッシュ両氏を「ウルブズ」（狼ども）と呼んで両氏の名譽を著しく穢した、という理由で権利停止処分に付しました。戦争を遂行しようとしたブレア氏にとっては、同議員は不倶戴天の敵だったわけですから、大変な好機到来となった、というのが、巷の専らの噂です。

五月一日に行われた地方選挙で、ブレア政権は、ほとんどの評論家の事前予測を裏切っ

て、惨敗しました。労働党は、これまで過半数の議席を制してきた全国第二の都市バーミンガムを始め、プリストル、コベントリーなど三十の都市の「カウンスル」と呼ばれる市議会の多数派を維持できず、八百以上の議席を失いました。国から大幅な自治権を与えられているスコットランドとウェールズの議会選挙では、前者は労働党が過半数を制せず、後者では制したものの、ブレア氏の「ニュー・レイバー」とは異なる、国民の福祉政策重視型の伝統的労働党が支持された結果とされています。

全国的な得票率は、保守党が三十五%、労働党が三十%、自由民主党が三十%となり、一九九九年地方選挙時の、労働党三十六%、保守党三十三%、自由民主党二十七%と較べると、労働党の大幅な後退が目立っています。

唯一、イラク戦争に反対した自由民主党が、労働党とほとんど肩を並べるまでに進出してきた理由の一つに、福祉政策を後退させて民営化路線を突っ走り、戦争を積極的に肯定する「ブレア労働党」を見限って、自由民主党に向かったという投票行動の変化があると言われており、事実、テレビのインタビューに対して、少なからぬ有権者が、そのような話をしていました。

前回の選挙では積極的な運動を繰り広げた労働党支持者たちが、今回はほとんど動かず、

選挙でも棄権に回ったということもあります。私の住む町を含むアッテルスフォードと呼ばれる地域の議会を例にとると、四十四議席の内、LDP（自由民主）が三十一、Con（保守）が十、Lab（労働）が〇、Ind（無党派）が三という結果になりました。ここは元々、保守党が圧倒的に優勢な地盤でしたが、今回はLDPの「地滑りの勝利」ということになる一方、Labは辛うじて残っていた二議席をも失ったのです。

この他の特徴としては、英国中西部ランカシャーに地盤を持つBNPと呼ばれる極右政党が十三議席を獲得したこと、スコットランド議会選挙では、戦争反対と貧困からの解放を訴えるSSP（社会主義党）が、一議席から六議席へと躍進したこと、環境破壊反対、戦争反対を訴える「緑の党」が、全国で六十議席へと大躍進したことなどがあります。

今度の選挙を全体的に見ると、過去における労働党、保守党並立の二大政党制から、三大政党時代へと変わりつつある一方、少数政党が徐々に勢力を伸ばしてきていることが分かります。また、投票率が三十四%にすぎないことは、既成政党、特に「ブレア労働党」への失望感が大きく作用しており、二〇〇五年に行われる総選挙にも影響を及ぼしそうです。選挙後に開かれた、あるパネル・ディスカッションでは、人種差別を公言する極右政党BNPの台頭を懸念する声が湧き起こっていました。

BNPは数年前に、バーンリーという英国中西部の町で、ムズレムと呼ばれるイスラム系市民との間で衝突事件を起こしています。今度のBNP進出は、この政党への国民の警戒心を、むしろ移民流入を厳しく制限する方向へと向かわせる恐れがあり、事実として、保守党は政府に対して、政治亡命を求める外国人の許可条件を厳格にするよう、圧力を強めております。

五月六日夕刻のBBCテレビのニュースは、冒頭で、バグダッド及びバスラで、栄養失調やコレラのために、次々と病院に運び込まれる幼児の映像を映しておりました。病院に入っても、設備も、医薬品もほとんど無く、医師はなす術がありません。このような状況は、戦争さえなかったら生まれなかったことでしょう。今度のイラク戦争を始めた人々、そして、積極的に支持してきた勢力は、その行動の説明責任及び今後の具体的対応を、厳しく問われていると言わなければなりません。

最後は、少し軽い話題で締めくくりたいと思います。

五月八日夕刻、いつもと同様にBBCニュースを見ていたところ、ロンドン市長ケン・

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

山上 真 (やまかみ しん)

1941年、東京大森区馬込に生まれる

東京大学文学部卒。教職（英語科）に就く

1998年より英国パブリック・スクール及び公立校で日本語を教える

2003年より、主として英国に在住、文筆活動に従事

作品：『英国・イラク戦争前後』（雑誌「葦牙」、2003年）

『英国通信』No. 1～8（「葦牙ジャーナル」2003～2005年）

英国便り 「イラク参戦」から「ロンドン爆弾テロ」まで

2006年 5月15日 電子出版発行

著 者 山上 真
発 行 者 瓜谷 綱延
発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
電話 03-5369-3060（編集）
03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Shin Yamakami 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01138-0

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。）

新 06.04.27 Hicom